

## フランス語カナ表記の構造

——音声表記の条件と効果——

和田 祐 一

Yuichi WADA

フランス語をカナ表記する場合、その目的によって次の2つの立場が考えられる。

1. カナ表記を媒介にして、学習者になるべく原音に近い発音をさせようとする場合。
2. 一般読者を対象とした印刷物において、国語表記法の原則に違反せよぬう表記する場合。

このうち1の効果だけを考え、2の原則に全く支配されない表記も行われている。例えば social を「ソスイアル」、votre を「ヴオトル」とするが如き、そのような工夫を行う理由は特に発音指導の立場から容易に推察できるが、このような表記をするに当っては、次の事実を十分に考慮しなければならない。即ち、

- このような表記は、そのまま一般向印刷物では用いることができない。

例えば、新聞、雑誌など、発音指導の場以外では用いられず、この表記に慣れた学生が新聞社に入った場合、再度カナ表記を学習し直さねばならぬ事実を考慮せねばならない。

- 学習者の日常生活において、国語表記の著しい混乱を生ずる。

特に今日の学生の表記力は甚しく衰えてをり、カナを扱いかねているものは

極めて多い。例えば、*vérité* を「ヴェリィテェ」、*parlé* を「パェルレェ」の如く表記する者が少くない。このような現状において、国語としての表記法を考慮しない表記は、かえって弊害が多い。

- 表記者の考え次第で、必ずしも意見の一致を見ることができないため、使用中種々の障害にぶつかる。
- 以上の事実に気付いた学習者は、この表記法を積極的に学習しなくなる。

従って、1の効果をねらう場合でも、2の原則を無視してはならない。この論文も、その2つの目的を同時に、できるだけ満たすことを主眼としてまとめたものである。

そこで、2の国語表記法としての「外来語の表記」（昭和29年3月国語審議会報告）を検討しておきたい。国語審議会の案については種種の問題があるが、この「外来語の表記」については、あいまいな部分は除き、明瞭に述べられた部分は、一応の標準として妥当と考えられる。このうちフランス語の表記に関係のある部分を見ると、まず**二大方針**が認められる。

1. 国語化した書き表わし方の慣用が固定しているものはこれを取る。
2. 慣用が固定せず二様にわたるものについては、**原語の発音**としてわれわれが聞き取る音を基準とし、国民一般に行なわれやすいことを眼目として、なるべく平易なほうを採る。

ここで特に後者が「原音の発音」を重視している点に注目したい。さらに、この方針を補ういくつかの原則の一つに

- 従来、**原語のつづりに引かされて**「ン」「ッ」「ー」を添えて書き表わしたものは、なるべくつけないようにする。

(例) *communiqué* はコンミュニケではなく、コミュニケ。

とうたわれている事実を重視したい。即ち後述の如く、フランス語のカナ表記は、原語のつづりに引かされて、例えば、同じ発音の *parti* と *par-*

tie を「バルティエ」と「バルティエー」に書き分けた例が多いのである。

以下、フランス語のカナ表記に関係のある原則をあげておく。

- 長音は、長音符号「ー」で表わし、母音字を重ねたり、「ウ」を用いたりしない

これによれば vous は「ヴウ」とせず「ヴー」と表記される。

- イ列、エ列の次の「ア」の音は、「ヤ」と書かずに「ア」と書く。

これに従えば、nation は「ナシヨン」ではなく「ナシオン」と書くことになる。いったん [nasjɔ̃] の [-jɔ̃] を「ヨン」と表記する理由を認めても「ナシヨン」と読み誤まる可能性を思えば「ナシオン」と表記することの価値を再認識することになる。

- 原音における「トゥ」「ドゥ」の音は、「ト」「ド」と書く。

これは [t] [d] の場合であって、[tu] [du] の場合を指すものでないことを付言すべきであろう。然らざれば tour が、「トール」となる。このような [tu] に対しては「トゥ」を保存し、「トゥール」を用いざるをえない。

- 原音における「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」「ヴァ」「ヴィ」「ヴェ」「ヴォ」の音は、なるべく「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」「バ」「ビ」「ベ」「ボ」と書く。(太字は筆者による)

これは国語審議会も「なるべく」としており、「ファ」「フィ」……の表記も正当と認められる。

- 原音における「ティ」「ディ」の音は、なるべく「チ」「ジ」と書く。(太字は筆者による)

これも「なるべく」の条件付きで認められている。

上述の前提のうち、後述の内容に関する事実として、長音符号「ー」の後で「ン」を用いることは禁じられていないことに注意を引いておきたい。

フランス語のカナ表記の現状は、各語学者、または教師が、それぞれ各自でカナ表記を工夫して使用しているだけで、と言ってよかろう。すでに述べた如く、日本語の正字法決定の上で一応の規準がありはするが、フランス語教育の場には、余り影響が強くないのが現状である。

しかし、現在不統一な状態で行われているとはいいながら、これら種々のカナ表記をよく検討してみると、全体に共通した表記が認められ、少くとも、この点では各表記者の間に意見の一致があると考えられる部分がある。たとえば *pénible* の表記は「ペニーブル」であって「ペニブル」ではなく、「ニ」と「ブ」との間に必ず長音の記号が入っている。また *chic* の表記は「シック」であって、決して「シク」ではなく、必ず「シ」と「ク」との間に促音の「ッ」が挿入される、などがその例である。

しかも、これらの長音記号や、促音の「ッ」は Fouché の音標綴りには何ら、これらに対応する表記(記号)が含まれていない。具体的に言えば、「ペニーブル」は [peni:bl] とはなっておらず [penibl] であり、シックも [ʃik] であって [ʃik:] ではなく、[ʃikk] でもない。(註：現在、日本で出版されている仏和辞典の音標綴りはほぼ統一されている、と見てよい。即ち Fouché に従った表記。) このように、Fouché の表記に無いものを敢えて付加え、しかもそれが大部分のカナ表記に共通だとすると、それが何ら統制のもとに行われたものでないだけに、その背後には重大な音声学的必然性があるにちがいない。つまり日本人である限り誰でもそこではそうせずにいられないのであって、しかもそれはカナ文字の表記のためより、むしろ日本語の音韻構造がフランス語のそれと全く異っているために生ずるので、例えばフランス語の長音と日本語の長音を同一視することはできない、というような構造的相異から生じているものである。

この論文においては、このような性質を、長音と促音と撥音の三点にしぼって検討し、カナ表記の構造を明かにしたいと考えた。

以下、使用した各種の資料のうち山本直文編「標音仏和辞典」を資料A；小林正著「フランス語の話し方」を資料B，とする。前者はカナ表記を付した仏和辞典として現在広く用いられており、カナ表記の仕方では、フランス語正字法に強く支配され、例えば複合母音は全て長音になっており、parti は「パルティ」、partie は「パルティー」で使い分け、また court は「クール」、courte は「クールト」で女性形でも長音になっている。正字法から機械的に transcrire できるので、フランス語の原音に接する機会の少い者には受容れ易く影響は大である。一方後者Bは前者と甚だしく異なるわけではないが、著者が発音指導に特に造詣深く、国際音標綴りで日本人を指導することの欠点を認め、むしろカナ表記の価値を再認識されて、その原理に従って資料Bを著されていること（同書「はしがき」の4参照）、また同時に発音指導に優れた新進の教授達が大部分後者に属する表記を行っているので、戦後の傾向の代表として取上げた。

## I 長 音

- 1) 各種のカナ表記を統計的に調べたところ、長音の現れる部分は次の五つに分けられる。
- (1) 国際音標綴りで長音の記号 [:] の付いている音節。
  - (2) 強勢のある閉音節。
  - (3) 強勢のある開音節。
  - (4) 正字法で重字になっている母音。
  - (5) 正字法において accent circonflexe のついた母音。

これを一つ一つ具体的に示すと、

(1) は辞書を見れば、国際音標綴りは出ているのだから、長音の記号 [:] のあるなしはすぐに解る。従って国際音標綴りにおける長音[:] の理論は省略するが、ただ後述の問題に関係があるので「長音[:] は強勢のある音節にしか現れない」ということにだけ注意をひいておこう。つまり音標綴りで[:] のある音節はすべてカナ表記で「ー」を付けてある。

しかし、ここで最も注目すべき事実は、「ン」の前に「ー」を付した例は比較的少ないということで、例えば décembre [desɑ̃:br] は「デンサンプル」が多く、「デサーンプル」は少い。しかし無いわけではない。

(2) 強勢のある閉音節。これは chemise, cuisine などに見られるものであるが、これは二つに分けることができる。即ち一つの groupe は、先にあげた(1)の中に出てくる、つまり国際音標綴りの中で長音の記号[:] が付いているもの。もう一つの方は、国際音標綴りには長音の記号[:] が付いていないで、しかもカナ表記では長音の記号「ー」が付いているものである。

つまり、これを具体的な例であげてみると、[ʃmi:z]の方は音標綴りの方に長音の記号[:] が付いているが、[kʷizin]の方は音標綴りには長音の記号が付いていない。同様の例をあげると、possible, capable 等がある。これは音標綴りでは長音の記号が付いていない。ところがカナ表記では必ず「カパーブル」、「ポシーブル」という風に長音になっていて、「カパブル」、「ポシブル」のように短音にした例は見られない。これが第(2)の groupe で、強勢のある閉音節である。

(3) 強勢のある開音節。これは先に例をあげると bateau の「オー」、envie の「イー」の例である。ただこの groupe に属するものは、表記者によって、長音をつける者とつけない者とがあり、また同じ表記者でも envie の場合は長音をつけるが、parti の場合はつけない、といった風に、現在のところ不安定である。

(4) 正字法において複合母音になっているもの(重字)。この論文ではカナ表記における長音の組織を5つに分類し、そのうち(2)と(3)は強勢のある音節に現われる場合を扱ったものであるが、以下に述べる(4)と(5)の *groupe* は強勢の有無に関係がない。——それで(4)番目の *groupe* にもどるが、これは正字法において複合母音になっているものである。例えば *o* と *u* が組合わさって [u] となるが如きである。この例は *maison* の *ai*, *déjeuner* の *eu*, *jeudi* の *eu*, *touchant* の *ou*, *beaucoup* の *eau* の5つによって代表されるものである。——代表というのは *beaucoup* の *eau* と *mauvais* の *au* とは同じものとして扱う、という意味。——これは別の言い方で表わすと、原則として、広音の [ɛ], [œ], 狭音の [ø], [u], [o] ということになる。ただし實際上、強勢のある開音節にこれが現れる場合は(3)に属するので、ここでは強勢のない音節のみを取上げる。

これらもやはり国際音標綴りでは長音の記号が無いのに、カナ表記では長音になっているものである。

ただし、この中で二つだけ不安定なものがある。即ち広音の [ɛ] と広音の [œ], つまり *mauvais* の *ai* と、*déjeuner* の *eu* とは人によって長音を付けたり付けなかったり、また同一の表記者でも場所によって長音にしたりしなかったりして不安定である。

(5) 正字法において *accent circonflexe* のついた母音。

これは資料となる語彙が大へん少なく、しかもその半数以上がすでに述べた(1)から(4)までの原則の支配を受けているので、その残りの更に少ない例、たとえば *gâteau*, *hôtel*, *hôtelier*, *hâtivement* などで調査したが、これは不安定である。しかし、どうしても長音にしなければおかしい、と思われる例は極めて少ない。例えば *hôtel* は「オテル」、*hôtelier* は「オートリエ」となっているが、後者を「オトリエ」としない理由は、「オート」とすれば「ト」が [to]→[to] の傾向を持つからにほかならない。

(「ー」の結合音声効果は後述。)別の言い方をすれば「オトリエ」とすると「オトリーエ」と読まれる危険性があるからである。つまりこの長音「ー」は *hô* [o] よりむしろ *te* [tə] の効果をねらったために必要となったものである。これに対し前者 *hôtel* の *te* [te] は「テ」で充分表現できるので「オーテル」とする必要はない。むしろ「オーテル」とすれば「オー」に強勢のつく可能性が多くなる。

## 2. カナ表記長音の効果

上述の各項について、長音の使用が安定したものについては、その効果を分析し、不安定なものについては、その理由を検討し、安定の可能性の有無と、今後の見通しが立てば、それを明らかにしたい。

(1) 音標綴りで [:] のある音節を「ー」で表記することについては、原則的には論議の余地はないが、「ン」の前に「ー」を使用する例が少い事実について、問題を掘下げてみたい。

資料Aにおいては「ーン」の表記は全く見られない (*monde* [mɔ̃:d] モンド/*décembre* [desɑ̃:br] デサンプル)。資料Bにおいても殆ど同様であるが、次の例も見られる。 *tante* [tɑ̃:t] ターント/*teinte* [tɛ̃:t] ターント (p. 14)。これが音声学的に極めて正しい処置であるにもかかわらず、余り行われたいのは、日本語では「ー」も「ン」も1モーラとして数えられるためであろうと考えられるが、France のカナ表記が「フランス」として固定してしまったことも、大きな原因の一つであろう。France [frɑ̃:s] をフランスと表記することには、非常な抵抗がある。しかし、この一例をもって、上述の有効な方法を引込めるわけにはゆかない。これに対抗するものとして、次の語が固定している事実を示しておきたい。即ち(仏)「サン・サーンス」、(英)「バーンス」、「ジョーンズ」である。



加うるに「ーン」の表記は、「ン」の音量をも弱める効果がある事は是非とも付加しておきたい、即ち、日本語の「ン」音はフランス語の鼻母音の[ɔ̃]よりも、はるかに重いのであるが、「ーン」とする時は「ー」を発音している間に呼気の量が減り、「ン」を発音するために残された呼気は半減するので、「ー」の後の「ン」音は普通の「ン」より遙かに弱くなる。このためにフランス語の[ɔ̃]に近くなるという効果を持つ。

なお、上記長音「ー」による「ン」音弱化の効果は、他の全ての鼻音にも適用したく考えられるものであるが、これはできない理由がある。それは他の一般の鼻音([ɔ̃]を伴わない鼻音)は、かなり長く([ɔ̃]があるかの如く)発音されることもありはするが、極く短く発音されることも、またしばしばだからである(tant de chose の tant は長いことが多いが、il y a du temps の temps は短いことが多い。これに対して、[ɔ̃]を伴う鼻母音は常に長い)。

また décembre の如く、次に[b, p, m]が来る時は、「ーン」の表記によって「ン」の[m]化を防ぐ効果もある。

故に、結論として、音標綴りに[ɔ̃]があれば必ず「ー」によってカナ表記されるべきである。

(2) 強勢のある閉音節の中で国際音標綴りの方では長音が付いていないのに、日本語の場合は必ず付いている、という場合。フランス語では、強勢のある閉音節の母音というものは、強勢がある限り自然に伸びるわけで、実際には長音である。少なくとも日本人の1モーラより長い。フランス人は長くしろと言われなくても強勢がある限り閉音節は自然に長く発音する。だからフランス人を対象とする限り、わざわざ長音の記号[ɔ̃]を付ける必要はない。

しかし日本人の場合には、そうは行かない原因がある。即ち、日本人の意識の中では短音と長音は1対2の関係になって意識されている。つま

り、モーラと呼ばれている意識があるので、長音でなければ1モーラである、つまり1モーラの型にはめようとする傾向がある。そこで1モーラにしようとする、いかにそこにアクセントがあっても、そこは短いままで次の音節に移ってしまう。それでこの場合に1モーラの束縛から日本人の意識を解放して、自然にアクセントのあるところを伸ばしても良いのだという気持ちを与えるために長音の記号をつけるのである。

なお、1.5モーラということは、日本人には出来ないことで、結果的にそうなることがあっても、2モーラの意識を与えることを覚悟の上で長音「ー」を使う。これによって1モーラの壁を破るわけである。それでフランス語の原音に近くなる。

さて然らば「強勢のある閉音節」は全て長音「ー」を付すべきか。特定の子音 [-t], [-d], [-s], 等破裂音の前では、長音「ー」の代りに促音「ッ」を、[-n], [-m] の前では「ン」を用いる（後述促音、撥音の項参照）。

また長音「ー」は最後から二番目にある時、その音節に強勢をつける効果を持つ。

フランス語の単語は、初級者の場合、語尾に強勢を付けて教えられ、エガリテ、リベルテ、という風になるが、この調子でキューイジュヌやペニブルを読ませると、前者では「ヌ」、後者では「ル」に強勢を付けて読んでしまう。この誤りは、長音「ー」を入れ「キューイジュヌ」、「ペニーブル」とすることによって容易に避けられる。

(3) 強勢のある開音節はまだ不安定であるが、ここでも語尾の強勢のある開音節を長音にする理由は無いわけではない。というのは、これは長音のしるし、つまり1モーラの壁を破っておかないと、1モーラで止めようとして声門閉鎖を日本人はやってしまうからである。例えば *bateau* の例で「バトー」と長音をつけておかないと、「バトッ」という風に声門閉鎖 (glottal stop) をやってしまう。時には直前の子音に影響され、軟口

蓋でストップをしたり、更にひどい時には硬口蓋でストップをやり、まるで [-k] や [-t] があるかのようなストップの仕方をする場合がある。

このようなストップから日本人を解放するために、長音の記号が効果を持っているのは事実である。

強勢のある開音節に長音「ー」を用いるか否かは、全体として不安定であるにもかかわらず、各母音ごとに検討すると、かなり安定していることが統計的に明らかになる。即ち、次の表で「短」「長」は、それぞれ短音、長音で安定し、長（短）とあるのは長短ともに認められるが、長音の方が多いことを示す。（正字法の例のうち複数の -s (-x) と三人称複数動詞語尾 -nt は省いた。）

[i]	-i, -ie, -is, -it, -ît, -y	(長) 短
[e]	-é, -ée, -ai	短
[ɛ]	-ès, -et, -ais, -ait, -aie, -êt	(長) 短
[a]	-a, -as,	短
[ɑ]	-as, -ât	短
[y]	-u, -ue, -ût, -us	(長) 短
[ø]	-eu, -eux, -eut, -œu	長
[u]	-ou, -oue, out, -ous	長……………→(註)
[o]	-o, -ot, -ôt, -aux, -aut, -eau	長 (短)

(註) 例 *courte, bourde, soulte, Moulte* etc. の *ou* は短音。

以上のうち [i], [ɛ], [y] が (長) 短であるが、長音にしなければならない例は認められず、従って全てを短音で統一しても、表記、効果の両面で全く差支えを生じない。[o] の場合も同じ理由でこれは長音の方に統一できる。

きて長音で表記されている [ø], [u], [o] には、はっきりした理由がある。

まず [ø], [u] は、ウ段のカナで表記され、これが強勢のある開音節（フランス語では最後の音節）にくると、日本語では語尾のカナになる。つまり長音にせず、ウクスツ（ト）ヌフムユルグツ（ド）ブブで表わすと、例えば [-k] も [-ku] も [-kø] も「ク」で表わされることになる。もし長音をつけて、例えば「クー」とすると、これが [-k] に誤解される可能性はなくなる。

[o] はオ段のカナで表記されるが、この段に [-t] と [-d] を表す「ト」と「ド」が含まれている。これも「トー」とすれば [-t] に誤解されることはなくなる。

また他のオ段の音が長音で示されるのは、次に述べる [ø], [u], [o] 全部に作用する効果のためである。即ち、[ø], [u], [o] は、ともに狭母音であり、円唇母音である。この種の母音は長く発音する、即ち時間をかけて発音する程、狭音化と円唇化を増す、これは通常 [o] よりも [ø] に近い音を発音している日本人に [o] に近い発音をさせるのに効果がある。

これは次の(4)と(5)で長音「ー」を用いる唯一の理由と考えられる。

(4) これは(1), (2), (3)の支配に優先されるので、結局、強勢のない音節の複合母音（正字法での）の問題となる。即ち

-au-, -eau-, は [o]

-eu-, -œu-, は [œ] (稀に [ø])

-ou- は [u]

であるが、の中で安定しているのは -ou- [u] を「ウー」で表すことだけで、あとは不安定である。今後の方向としては、前項 [ø], [ø], [u] の問題で述べた如く、狭音化、円唇化を要求される場合にのみ、長音「ー」

を用いるのが良からうと思われるが、本論文の目的は、何ら新しい表記法を主張しようとするものではない。

何事によらず、言語における新方式は、社会的に広く受容られなければ、空論に終る。故に本論文はむしろ歴史的に漸次勢力を強めてきた——自然にその使用範囲を広めてきた——表記法の中から、音声学的に、また同時に国語正字法の上からも、合理的と認められるものを拾い上げて、科学的裏付けをし、それによって教育効果の上にも、国語正字法の上にも、確たる拠所をつくり、不自然でなく、しかもより理想的表記に達するための一つの資料を提供しようと試みたものである。

(5) の場合も (1), (2), (3) の支配が優先するので (4) と同様である。詳細は 1. の (5) に述べた通りである。

### 3. 促音「ッ」の現れる部分

#### (1) 強勢のある閉音節

##### (a) 破裂音で閉じる場合。

[-Vt], [-Vd], [-Vk], [-Vg], [-Vp], [-Vb]

(Vは母音を示す)

##### (b) [-Vs], [-Vʃ] で閉じる場合。

#### (2) 強勢のない音節。これは(1)よりも「ッ」を入れる傾向が少い。

(a) [-Vt-], [-Vd-], [-Vk-], [Vg-], [Vp-], [-Vb-] の前の音節は「ッ」の入ることもあり、入らないこともある。不安定。

(b) [-Vs-] の前の音節は不安定。

[-Vʃ-] の前の音節には「ッ」を付けない。

4. 促音の現象一般についてまず述べねばならないが、これは日本語における強勢と密接な関係があるので、日本語の強勢について簡単に説明を加

える。

日本語の強勢は、英仏伊西のアクセントと甚だ異り、むしろイントネーションに近いものである。

日本語は、各音節に特定の音程があり、その音程は4段階に分けられる。低い音程から順に、第1音階、第2音階、第3音階、第4音階とすると、この4つは、それぞれ、低い「ソ」と「ド」[レ]「ファ」となり、「たまごやき」の如き棒読み（ゼロ型と呼ばれる）の型に属するものは第1音節の「た」がドで以下全部レの高さになる。即ち「ドレレレレ」となる。これ以外の型は、第1音節が高い方のファで始まって以下全部低いソになる（1型）か、または第1音節をドで始めて以下高いファを続け、一旦下がるとド、レを飛越して低いソに落ちる（2型、3型、4型……）かの、何れかである。

問題になるのは、この2型、3型、4型……に属するものの最後の音節が非常に低いことである。例えば「わたしぶね」ならば「ね」は非常に低い音で、しかもこの低さの音はもっぱら語尾の音節に現れる。

この傾向のために、最後から2番目の音節を高めると、語尾の音節は非常に低く発音される傾向が日本語（東京方言）にはある。

そこで、カナ表記において、最後から2番目の音節を高める表記法をとると、最後の音節は低く、従って弱く発音され、特にイ段とウ段の音は無声化される。例えば「マチ」と「マッチ」を比較すると、「マッチ」の「マ」は、その後に「ッ」が入ることによって強勢を伴い、これに反して「チ」は弱化し、特にイ段の音であるために、無声化（東京方言）する。

（同様な現象は、長音「ー」によっても生ずる。）即ち

- 1) 促音を最後から2番目の音節に付けると、そこに強勢を生ずる。
- 2) 最後から2番目の音節に強勢があると、最後の音節は低音化、弱音化する。

この現象のために、pipe [pip] は「ピプ」より「ピップ」の方が原音に近くなる。即ち「ピフ」は [pipu] の傾向を持つが「ピップ」は [pip] に近く発音される。また nette [net] を「ネット」とし、つまり、やむをえず [-t] を [ト] で表しても、[ネト] [neto] よりも「ネット」 [neto] の方が [net] に近く発音される。

この事実(a)の [-t], [-d], [-k], [-g], [-p], [-b] の場合にも、(b)の [-s], [-ʃ] 場合にも適用される。その例を以下にあげておく。

- (a) [-t] cigarette [sigarɛt] シガレット  
 [-d] décide [desid] デシッド  
 [-k] avec [avɛk] アヴェック  
 [-g] dialogue [djalɔg] ディアログ  
 [-p] tulipe [tylip] チュリップ
- (b) [-s] fasse [fas] ファッサ  
 face [fas]     ッ  
 [-ʃ] approche [apʁɔʃ] アプロッシュ

(2)は不安定で次の如くである。

- (a) [-t-] nettement [nɛtmɑ̃] ネットマン  
 mettez [mɛte] メテ
- (b) [-s-] laissez [lɛse] レッセ  
 classicisme [klasisism] クラシシスム  
 [-ʃ-] acheminer [aʃmine] アシュミネ  
 méchant [mɛʃɑ̃] メシャン

## 撥音

5. (1) 鼻音は全て「ン」を付ける。
- (2) 強勢のある閉音節 [-n] の前に挿入される。  
理由は上述の長音、促音と同じ効果のため。
- (3) 強勢のない音節では正字法が -nn- でも「ン」を入れない。

例 donne [dɔn] ドンス

donnez [dɔne] ドネ

以上まとめると

## 長音

- (1) [:] は必ず「ー」で表記。
- (2) 強勢のある閉音節は、促音の(1)を除き「ー」を入れる。
- (3) 強勢のある開音節のうち、狭母音 [o], [ø], [u] は「ー」を付ける。
- (4) 強勢のない複合母音：ou [u] のみは必ず「ー」を付ける。他は未定。
- (5) 強勢のない *accent circonflexe* 付きの母音は(4)に準ずる。

## 促音

- (1) 強勢のある閉音節：破裂音と [s], [ʃ] の前だけは「ッ」を挿入。
- (2) 強勢のない音節：[ʃ] の前には「ッ」を入れない。他は未定。

## 撥音

- (1) 鼻母音は「ン」を付ける。
- (2) [-n] で終るものには「ン」を挿入して、[ンヌ]とする。
- (3) 強勢がなければ正字法 -nn- でも「ン」は入れない。

(大学部助教授)